

食を殺したマクベス

越智 敏之

Banquo: Were such things here, as we do speak about,
Or have we eaten on the insane root
That takes the reason prisoner? (I, iii, 83-85)

1. 眠れないスコットランド、食べられないスコットランド

「もう眠りはない、マクベスは眠りを殺した」。

国王ダンカンを殺したマクベスが、自ら犯した罪の重さに耐えかね、第二幕第二場で叫んだこの台詞は、『マクベス』を観たことがある者なら必ず頭に焼きついている台詞だろう。実際ダンカン暗殺以後の劇中世界は昼と夜との境界があいまいになり、眠りが消滅したかのような、あるいは劇中世界そのものが登場人物たちの悪夢と化したような、妖しげな風景のなかで話が進んでいく。1606年、マクベス夫人役の役者が突然死をして以来、『マクベス』を演じた役者に事故が多発したため、呪われた劇という不気味な噂がたてられたが、この事故の多発も、劇中世界の暗さを演出するため、舞台が暗くなるが多かったためだとする説明もある。

ただマクベスが殺したのは眠りだけではない。この有名な台詞につづけてマクベスは、眠りを食べ物にたとえている。

Balm of hurt minds, great Nature's second course,
Chief nourisher in life's feast; (II, ii, 38-39)

食も同時に殺されたのだ。もちろんこの箇所はあくまで比喩表現にすぎないの

だが、この場面以降、マクベスは眠れないことを強調するたびにまともな食事ができないことにも言及する。例えば第二幕第三場、ダンカンの暗殺が発見される場面では、マクベスはダンカンを失ったスコットランドをワインが消えうせた酒蔵に例えている。また、第三幕第二場、マクベスはなんとか王位にはついたものの、その王位がやがてはバンクォーの子孫に奪われるのではないかと怯えて、その心情をこう語っている。

But let the frame of things disjoint, both the worlds suffer,
Ere we will eat our meal in fear, and sleep
In the affliction of these terrible dreams
That shake us nightly. (III, ii, 16-19)

眠りが殺されたことと同時に強調される、この食の消滅、あるいは汚染。これはなにも右記のように、登場人物の台詞の端々でメタファーとして語られ、事実として報告されているだけではない。ダンカンの護衛にマクベス夫人が差し入れたポセットには眠り薬が入っているし、第三幕第四場、国王となったマクベスがスコットランドの重臣一同を居城のダンシネーンに呼び、大宴会を催すが、そこでもマクベスの乱心が原因で、出席者ははじめの乾杯で飲み干した飲み物以外、何も口にすること無く退出する。さらには第四幕第一場、魔女たちが釜を囲んで作り上げる気味の悪い地獄鍋。これを魔女たちは‘hell-broth’、あるいは‘gruel’と呼んでいる。‘broth’とは肉で出汁を取ったスープのことで、‘gruel’とは牛乳や湯で作った粥のことだ。つまり登場人物の台詞のなかで語られる食の消滅は、現実のスコットランドでの出来事と対応している。そして魔女たちの作り出す地獄鍋は、食が消滅したスコットランドそのものの、グロテスクなパロディとなっているのだ。

本章の冒頭に引用した台詞は、叛乱を平らげ凱旋するマクベスとバンクォーに、三人の魔女が、マクベスは王となる、バンクォーの子孫は王となると予言して消えうせた後、バンクォーがもらした台詞である。ここで言う「きちがい草の根」とは英語では‘the insane root’となっていて、アーデン版のテキストでは「毒ニンジンやヒヨス、あるいはベラドンナのことだろう」と解説されている。こうした植物は麻薬性の強い植物で、食べれば幻覚や幻聴に悩まされ、当然量によっては死んでしまう。また魔女狩りの時代には、魔女が作る不気味

な軟膏の材料とされてもいた。したがって『マクベス』に登場する三人の魔女を考えれば、この台詞はうってつけの台詞といえる。だがそれ以上に、この台詞はその後スコットランドが陥る窮状を予見させる言葉となっている。「きちがい草の根」を誤ってでも食らってしまうような国にスコットランドは成り果ててしまうのだ。だが、登場人物の台詞にあるメタファーで強調されているのは、食の消滅ばかりではない。食にまつわる空間の崩壊もメタファーとして語られる。その食にまつわる空間とは庭園のことだ。

2. 庭園が持つ政治的寓意

原罪を信じるキリスト教社会においては、自然は生まれたままの自然ではない。アダムとイヴの墮落が原因で、神に呪を受けた自然だった。エデンの園という庭園の中にある自然こそ、本来の自然の姿だったのである。中世からルネッサンスにかけては、こうした考えは生きた伝統であり、だからこそ大航海時代の背景には、その動機の一つとしてエデンの園の探索があり^①、また16世紀から17世紀にかけては、楽園の復活を目指して、大洪水によりちりぢりになったエデンの園の植物を世界中から収集しようと目論み、つぎつぎに植物園が造園された^②。また、ルネッサンスのころに流行したイタリア式の整形庭園も、その背景に、墮落以前の世界には秩序があった、という当時の人々の信念があった^③。日本人にしてみれば、それこそ「不自然」に思える幾何学的に刈り込まれた植木も、当時の人々が本来の自然と信じるものの再現を試みた結果生まれたものだった。

したがって、エデンの園の再現を究極の目的とした庭園は、本来の自然を再現するために、当時よく使用された対照法的なレトリックを使って表現すれば、ネイチャー〈自然〉を アート〈人工〉で矯正していく場所だった。1583年よりヨークシャーで教会区牧師を勤めるかたわら、自分自身の庭園を48年間管理してきたウィリアム・ローソンも、『新しい果樹園と庭園』（1618）のなかで、造園における ネイチャー〈自然〉と アート〈人工〉の関係についてこう述べている。

ネイチャー自然の個々の業における過ちを、分別の力アートで察知して、慎重に、そして巧みに正していく存在こそが人工なのである。肥沃な土地に自然とアザミが生えてしまった場合、木々の生え方が密集しすぎたり、まばらすぎたり、

無秩序すぎる場合、(手入れをしなかったため)無駄な枝が生えてしまった場合、などなど、そうした場合には経験から教えを受けて、人工^{ア-ト}でそれを直すのです。(ルビ筆者)⁽⁴⁾

「アザミ」はアダムとイヴの楽園追放以降地に覆うようになった植物である。牧師でもあるローソンは聖書の記述をほのめかしながら、アザミが生えている状態が自然なのではなく、アザミが生えていない本来の自然を回復するために〈人工^{ア-ト}〉が必要なのだと説明している。

人間の墮落が原因で生まれた無秩序に秩序を与えて、原初の楽園を復活させる。それが造園であり、庭師の仕事となれば、庭師や庭師の仕事が国家の政のメタファーとして利用されるのも、キリスト教社会のなかでは至極当然の成り行きだっただろう。16世紀初頭にはヘンリー八世がハンプトンコート^{ア-ト}の庭園に、チューダー王家の紋章にあるライオンや竜、グレーハウンド、一角獣といった動物の像や刈り込み装飾を設置し、花壇を囲う柵の色をチューダー王家の色である緑と白の縞模様^{ア-ト}に塗った⁽⁵⁾。また17世紀にはイタリアとの国交が回復し、エリザベス一世の時代まではフランスを経由して入ってきていたイタリア式ルネッサンス庭園の様式が直接流入するようになる。これはいわゆる整形庭園で、幾何学的に刈り込まれた植木の整然とした有様は、王の支配による秩序という庭園の政治的寓意をいっそう際立たせずにはいられない。フランシス・ベイコンが『随筆集』のなかで「王者にもふさわしい庭園」の有り様を模索したのもこの時代に入ってからだ。

シェイクスピアの作品でも、庭園を国家になぞらえるのは常套的な表現である。たとえばハムレットはデンマークのことを「雑草の伸びるにまかせた荒れ放題の庭」(第一幕第二場)と毒づき、『ヘンリー六世』では王妃のマーガレットがヘンリー六世に、グロスター卿の増長を放置すると、雑草が「庭じゅうにはびこる」(第二部第三幕第一場)と警告している。こうしたメタファーが最も明確な形で表現されるのは、『リチャード二世』においてだろう。王を「神の代理人」と終始語りつづけるこの劇では、イングランドを「第二のエデン、地上のパラダイス」(第二幕第一場)に喩え、「神の代理人」であるリチャード二世の動かしがたい敗勢を、「この国では、月桂樹が一本残らずみんな枯れてしまった」(第二幕第四場)という言葉で表現している。エデンの園を常春と信じ、四季の移り変わりさえ人間の墮落の結果と見なされていた当時の社会で

は、月桂樹などの常緑樹はエデンの園を再現するために重要な造園アイテムだった⁽⁶⁾。ヘンリー八世の時代、修道院を解体した折に、ロンドンのカルトゥジオ会修道院から、イトスギ、イチイなどの常緑樹とともに、月桂樹もハンプトンコートへと移植されている⁽⁷⁾。つまりリチャード二世の敗北が、エデンの園の庭師であり、「神の代行者」でもあるアダムの楽園追放に喩えられているわけだが、こうした一連のメタファーは第三幕第四場、ヨーク公爵邸の庭園で働く庭師の台詞のなかで最もあからさまになる。

Go, bind thou up young dangling apricocks,
which like unruly children make their sire
Stoop with oppression of their prodigal weight,
Give some supportance to the bending twigs.
Go thou, and like an executioner
Cut off the heads of too fast growing sprays,
That look too lofty in our commonwealth:
All must be even in our government.
You thus employed, I will go root away
The noisome weeds which without profit suck
The soil's fertility from wholesome flowers. (III, iv, 29-39)

『リチャード二世』は、ボーリングブルックの叛乱にあい、王位を追い落とされたりチャード二世の生涯を劇にしたものだが、庭師はさらに、ボーリングブルックの叛乱について噂する。親戚のボーリングブルックに囚われたりチャード二世に対する庭師の評価はなかなか辛らつだ。

O, what pity is it
That he had not so trimm'd and dress'd his land
As we this garden! We at time of year
Do wound the bark, the skin of our fruit-trees,
Lest, being over-proud in sap and blood,
With too much riches it confound itself;
Had he done so to great and growing men,

They might have liv'd to bear, and he to taste
Their fruits of duty. Superfluous branches
We lop away, that bearing boughs may live;
Had he done so, himself had borne the crown,
Which waste of idle hours hath quite thrown down. (III, iv, 55-66)

ウィリアム・ローソンは自著の読者であるジェントリー階級を持ち上げて、「地上の神々」であるジェントリーをエデンの園を造園した天上の神に例えているが⁹⁾、シェイクスピアは支配者を、エデンの園の管理人であるアダム、つまり庭師に例えている。そして庭園は、ヘンリー八世がハンプトンコート庭園で暗示したように国家を象徴し、樹木の枝が家臣や国民、雑草が泥棒などの国家の秩序を破壊する不届き者としている。エリザベス女王もテューダーローズやノバラによく例えられていたわけだが、人を植物に例えるのは洋の東西を問わない一般的な比喩表現であり、シェイクスピアの作品中にも〈樹木＝人〉というメタファーがふんだんに使われている。逆にこうしたメタファーが一般的だからこそ、放っておけば無秩序に成長してしまう、呪いをかけられた植物を秩序立てる庭園に、政治的寓意が生まれやすくもあったのだろう。

3. 食糧の生産場所としての庭

ヨーク公爵邸の庭には杏(apricocks)の木が植えられている。杏はヘンリー八世の時代にイングランドに移植されたもので、その百年も前のリチャード二世の時代にあるわけもないのだが、これはシェイクスピアにはつきものの時代錯誤というやつだ。しかし杏はシェイクスピアの時代にはまだまだ高価な果物で、公爵の庭を飾るには相応しいものだった¹⁰⁾。

だがこの杏はただの飾りというわけではない。庭師の「あのかたも、成りあがりの連中にそうなさっていたら、連中も生きのびて実を結び、あのかたもその忠義の果物を味わっておられたろうよ」という台詞からもうかがうことができるように、日本とは違い、西洋では庭園は食糧の生産場所でもあった。これは園芸を扱った当時の書物のなかに、現代でいうところの農芸書が含まれていたことを考えれば明らかなことだ。またこれには宗教的な背景もある。旧約聖書にもあるように、神がエデンの園に、「見るからに好ましく、食べるに良い

ものをもたらしあらゆる木を地に生えいでさせ」(創世記2・9)、「人がそこを耕し、守るようにされた」(創世記2・15)からである。そもそもエデンの園を意味する‘paradise」という言葉自体が、古代ペルシャ語で「果樹園」を意味する‘pairidaeza」に由来している。

シェイクスピアの時代、果樹園は庭園の一部にすぎなかったが、欠かすことのできない重要な一部だった。前出のローソン⁽¹⁰⁾にしる、ジェームズ一世の薬剤師を務め、『日のあたる楽園 地上の楽園』(1629)と題する本草書を執筆したジョン・パーキンソン⁽¹¹⁾にしる、「楽園(エデンの園)」とは「庭園」あるいは「果樹園」だったと、両者を並列して楽園像を語っている。庭園のなかでも果樹園が重視された背景には、人類最初の食糧が、エデンの園で採取できる果実やハーブ類だと当時考えられていたことがある。楽園の追放後はじめて人間は穀物や動物を食すようになり、そのことが原因で、不死の存在だった人間は寿命をどんどん削られていくことになった⁽¹²⁾。

シェイクスピアの時代の庭園にも、果物を生産する果樹園だけでなく、ハーブや野菜を生産する菜園、食用の淡水魚を放っておく生簀が構成要素として存在しており、庭園は食糧生産の場としての意味合いが濃厚だった。その一方で17世紀に入ると、現代の日本人にはもっと馴染みやすい、庭園が持つ‘pleasure garden’(楽しみのための庭)としての側面がことに重視されるようになっていく。パーキンソンの『日のあたる庭園 地上の楽園』は庭園のそうした側面に特に焦点を当てた本草書だった。しかしだからといって、この‘pleasure garden’が食糧生産の場としての庭園とまったく異質のものとは見なされていたわけではない。パーキンソンは‘pleasure garden’の宗教的な正当性を主張するために、食糧生産の場としての庭園の宗教的背景として先ほど引用した旧約聖書の同じ一節を取り上げて、特に「見るからに好ましく」の部分で強調しながら自説を展開している⁽¹³⁾。両者ともに宗教的な根拠は聖書の同じ一節にあり、そして両者ともに当時の庭園のそれぞれの側面にすぎなかったのだ。実際、『日のあたる楽園 地上の楽園』は、「心地よい花々の庭」、「菜園」、「果樹園」の三章から成り立っており、本文612頁のうち472頁が第一章に割かれているのだが、それでも食用や薬用植物のレシピを掲載している。そしてウィリアム・ローソンも、庭園が持つ憩いの場としての性質を積極的に賞賛しながらも、その際には必ず庭園から収穫される産物を称えている⁽¹⁴⁾。その庭園に生産性があることが楽しみの根源の一つなのだ。さらにローソンは、庭園が生産

できる産物として、サイダーとペリーのレシピも掲載しており、庭園と食糧生産の関係の深さをうかがわせている。この庭園、とくに果樹園が持つ生産性は、ローソン以降も17世紀を通じてたびたび論じられたテーマだった。

キリスト教においては果物が人類最初食物とされていた。聖書は食材名に乏しく、具体的にどの果物を食べていたかははっきりしない。ただ、シェイクスピアと前後する時代に生命の木の正体だと良く考えられていたのはヤシの実である。よくリンゴだといわれている禁断の実に関しては、あまり探求熱がなかったようで、その正体についてはほとんど言及が残っていない。唯一ジェラードが『本草書』のなかで、バナナがその正体であるとする俗説を、疑わしげに紹介しているだけである。さてこの果物だが、16世紀から17世紀にかけては流行の食材になっていく。もちろんこの背景には果物がもつ宗教的な正統性があり、造園に向けられた宗教的な情熱と同じ情熱があったのだろう。人間の墮落は禁断の果実を食べたことが理由だと一般には考えられていたが、アダムの体からイヴが作られ、性の分離が完全な存在としての人間の崩壊を招いたという考え方もあった。当時ほとんどの植物には、神や天使、あるいは分離以前のアダムと同様、性別が存在しないと信じられており、生殖行為なしに生み出された果物は、きわめて宗教的に正しい食べ物と言えた。墮落以前の完全な人間への回帰願望が果実の流行の背景にはあったと言われている⁽¹⁵⁾。

だがこの果物も、当時の医学の分野においてはあまり芳しくない評価を受けていた。当時の医学において古典中の古典であったガレノスが、果物を食べると発熱するので体に悪いと考えていたためだ。ガレノスは自分の父親が百歳まで生きたのは、果物を食べなかったことが原因だと考えていた⁽¹⁶⁾。中世を通してガレノスのこの見解は絶対的で、16世紀に入っても強い影響力を持ち続けたのだが、ただイングランドの著名な医師であるトマス・エリオットは、人類のもともとの主食である果物が食材として不適切なものになったのは、穀物や野菜、魚を食べるようになって人間の体質が変化したためだ、と考えた⁽¹⁷⁾。聖書と古典との間にある齟齬をトマス・エリオットが埋め合わせようとした背景に、果物の流行があったかどうかはわからない。ただ医学的な見解はどうあれ果物の人気は高まり、たとえば料理の付け合せとしてレモンを出すのもこの時代に始まったことだ。

4. 庭園を破壊する魔王

庭園は宗教と政治、食と娯楽が分かちがたく融合する空間だった。果樹園で生産される果物は、単なる食糧というより、楽園を失う以前の人間に戻りたいという、当時の人々の願望を色濃く投影した食材だった。国家の支配者は、エデンの園のアダムと同様、神の代行者として〈庭園＝国家〉を手入れし、墮落以前の秩序を回復して国家をエデンの園へと変えていかなければならない。そして支配者にとっての最大の義務は、〈庭園＝国家〉を多産たらしめることだ。ところがダンカンを暗殺して国王となったマクベスは、スコットランドという庭園を徹底的に破壊して、食を殺してしまう。

『マクベス』のなかには‘garden’（庭園）という単語は一度も出てこない。‘orchard’（果樹園）や‘gardener’（庭師）という言葉も使われていない。だがシェイクスピアは、ダンカン、マクベス、マルカムという三人の王に、イメジャリーの世界でそれぞれ違った形で樹木と関係を持たせ、その関係の相違を通じて、三名の王としての資質の違いを表現し、スコットランドに庭園というイメジャリーを付与している。

まずシェイクスピアは、ダンカンの家臣への愛情を、庭師が樹木に注ぐ愛情に見立てて表現している。第一幕第四場、凱旋してきたマクベスとバンクォーとをダンカンはフォレスの宮殿で迎え、マクベスにこう言っている。

I have begun to plant thee, and will labour
To make thee full of growing. (I, iv, 28-29)

ダンカンはつぎにバンクォーへねぎらいの言葉をかけるが、バンクォーはこう答える。

There if I grow,
The harvest is your own. (I, iv, 32-33)

ダンカンは果樹である家臣に惜しみない愛を与える庭師としての王であり、スコットランドは庭師ダンカンが支配する庭園ということになる。

だが、ダンカンを暗殺して王位についたマクベスには庭師としての資質がな

い。妻以外には誰も信用できないマクベスは疑心暗鬼に陥り、つぎつぎに家臣を殺して、スコットランドを恐慌状態に陥れてしまう。シェイクスピアはそんなマクベスのイメジャリーの世界での姿を、庭園から樹木を根こそぎにしている魔王として表現する。第三幕第一場、バンクォーの子孫が魔女の予言どおり王となることを恐れるマクベスは、自分の惨めな運命をこう語っている。

Upon my head they placed a fruitless crown,
And put a barren sceptre in my gripe,
Thence to be wrench'd with an unlineal hand,
No son of mine succeeding. (III,i, 60-63)

さらにつづけて、バンクォーの子孫に対して怒りを向ける。

and mine eternal jewel
Given to the common enemy of man,
To make them kings, the seed of Banquo kings! (III, i, 67-69)

頭に「実を結ばぬ王冠 (fruitless crown)」をかぶり、手に「不毛の王笏 (barren sceptre)」を握り締め、「バンクォーの種(the seed of Banquo)」への怒りで打ち震えるマクベスの姿は、もはや王というよりは、禍々しい魔王の姿と言ったほうがぴったりだろう。また、第四幕第一場、「洞窟の場面」で魔女に運命を予言するよう迫り、その代償になにをしてもかまわないと言っている。

Though bladed corn be lodged and trees blown down;
...
though the treasure
Of nature's germens tumble all together,
Even till destruction sicken; answer me
To what I ask you. (IV, i, 55-61)

この台詞は庭師としての国王の役割の完全な放棄を意味している。そしてそれ

と引き換えに、マクベスは自己の不滅を約束する「バーナムの森」の予言を聞き出すのである。

「バーナムの森」が動かぬ限り、マクベスは不滅である、という予言は、『マクベス』の種本であるホリンシェッドの『年代記』の記述を借用したもので、シェイクスピアのオリジナルではない。だがすでにイメジャリーの世界で、ダンカンやマクベスと樹木との関わりが表現され、庭園としてのスコットランドというイメージが出来上がっているために、この予言には種本にはない意味合いが生じている。森とは何だろう。ヨーロッパの文明は森を切り開いて成立してきた。森には魔女や魑魅魍魎や賊が跋扈し、しかもアダムとイヴの原罪ゆえに呪いがかけられている。森は放っておけばその生命力に任せて無秩序に広がり、人間が築き上げた文明を飲み込んでしまう。森は本来、動くものなのだ。シェイクスピアの時代でも、現在では「荒野」という意味の‘wilderness’という単語は森のことを指していた。だから魔女のこの予言は、マクベスが庭師として、森の自然を人工ネイチャーによって正しく矯正アートし、スコットランドをエデンの園へと導いていかなければ、もっと簡単に言えば、しっかりスコットランドを統治しなければ、マクベスは滅びる、という意味だ。もっともこの劇が執筆された時代には、森は海軍の充実のため軍艦の材料となり、かなり伐採されてしまっていたのだが。それでも現代に比べれば、森はずっと生命力に満ちていただろう。

そしてマルカムは「バーナムの森」の樹の枝を切る。森は庭師としての務めを果たさぬマクベスの圧政のために、無秩序に陥ってしまったスコットランドという庭園の変わり果てた姿だ。その森の樹の枝を切るという行為は、混乱した自然ネイチャーに秩序をもたらすために人工アートの技をつかったということ、つまり庭園化を意味する。これはマルカムが自分が庭師であり、国王であると宣言したに等しい。そして樹の枝を掲げた家臣たちは、イメジャリーの世界での自分自身の姿である樹木の枝と一体化して、マクベスの居城ダンシネーンに攻め上る。魔女の謎めいた予言にかけられた言葉の魔法が解ける瞬間である。樹木が人間である以上、バーナムの森が動かぬ限りマクベスは不滅だということは、「叛乱が起こらなければ、マクベスは死なない」という意味でもあったのである。

5. ホリスティックな食の世界の崩壊

マクベスの食の破壊は徹底的だった。先に述べたとおり、マクベスは食卓も破壊している。庭園が食料を生産する場所なら、食卓は食料を消費する場所で、キッチン一つをはさんで両者はつながっている。そして食卓は、庭園が寓意的に示していた政治的な秩序を目に見える形で実演する場所でもある。バンケットにおける当時のマナーがいかに所属する政治階層に左右されたか、詳細は別の機会に譲るが、現代のそれよりはるかに秩序だったものだった。階層秩序が現代よりも確固たるものだったことに加えて、食卓で個人が占有するスペースが現代の場合より限られており、しかもコップなどは共有して使用していたため、無作法は即座にバンケットに混乱を招いてしまう。庭園のイメージャリーのなかで、果樹として描かれた家臣たちは不毛の魔王マクベスに根こそぎにされるのだが、現実世界のバンケットにおいては、狂気の暴君マクベスに食卓から追い立てられる。

マクベスの食の破壊はそれだけにとどまらない。第二幕第四場、ロスは老人に、「時計では昼だ、それなのに暗闇が空を旅するあかりの首を絞めている。夜が勢いをえたのか、昼が恥らっているのか、いのちをもたらず光が口づけすべき台地の顔を暗闇が埋葬してしまった」と、ダンカン暗殺以降の「自然に反する」自然現象を語っている。四季までもが墮落の結果だとすれば、マクベスの庭園の破壊が、天体にまで影響を与えたとしてもおかしくはない。動物がおたがいに捕食するようになったのも人間の墮落が原因だと考えられていたが、ロスの話を聞いた老人は、フクロウが鷹を殺して食う有様をロスに語っている。人間のエデンの園からの追放で生じた動物の捕食関係が、第二のエデンの園の破壊で、さらに狂ってしまったのだ。

食は天体とすら関係を持っていた。当時の医学理論であった体液理論は占星術ともつながって、人体にある四つの体液は天体の動きに影響を受けると考えられるようになっていたからだ。四つの体液とは血液、胆汁、黒胆汁、粘液のことで、そしてこの体液は万物を構成する四つの元素、すなわち空気、火、土、水と対応関係を持っていた。血液は温かく湿っていて空気と対応し、胆汁は温かく乾いていて火と対応している。黒胆汁は乾いていて冷たく土と対応し、粘液は冷たく湿っていて水と対応している⁽¹⁸⁾。病気とはこれら体液のバランスが崩れることで、それを治療する方法は、増えすぎた体液を対外に取り出すか、

減りすぎた体液と対応する元素からなる食材を食べることだった。つまり体液理論は医食同源の西洋版で、実際アンドリュー・ボードは『健康の食べ物』のなかで、「いい料理人は半ば医師である」と言っている⁽¹⁹⁾。さらにこれらの四体液は惑星の運行の影響を受け、人体の各部分は占星術の十二宮図と対応していた⁽²⁰⁾。そのため人を持って成す場合、用意する料理を判断するため占星術を用いることもあったようだ。

人体は食を媒介にして、食卓、庭園、庭園が象徴する国家、そして宇宙にまでつながっていた。それぞれのマイクロコスモスが重層的に重なる食の全システムを、マクベスは破壊したのである。それはまさしく、ホリスティックな破壊だった。『マクベス』には医師が二人登場している。一人はイングランドの宮廷医で、手を触れるだけで瘰癧の患者を治療してしまうイングランド王の奇跡を亡命してきたマルカムとマクダフに誇らしげに説明している。もう一人はスコットランドの宮廷医で、マクベスからスコットランドの病を治療する術を教えてみると毒づかれる。これら二つの場面は、シェイクスピアが劇中で表現したホリスティックな食のシステムのなかでこそ意味を持つ。いい庭師はいい食材を生産し、人体の病巣まで取り除いてしまう。スコットランドの病巣は、よき庭師であり、ケースネスが「名医」に例えるマルカムでなければ取り除くことはできない。繰り返しになるが、ホリスティックな食の崩壊が起こったスコットランドでは、人は魔女たちが料理した地獄鍋を食らうしかないのだ。

Notes

- (1) John Prest, *The Garden of Eden---The Botanic Garden and the Re-Creation of Paradise* (New Haven and London: Yale University Press, 1981), p.p.27-37.
- (2) *Ibid.*, p.p.38-56.
- (3) *Ibid.*, p.89.
- (4) William Lawson, *A New Orchard and Garden with the Country Housewives Garden* (Trowbridge: Cromwell Press, 2003), p.33.
- (5) Roy Strong, *The Renaissance Garden in England* (London: Thames and Hudson, 1979), p. 25.

- (6) Prest p.p.67-68.
- (7) Prest p.68.
- (8) Lawson p. 87.
- (9) F. A. Roach, *Cultivated Fruits of Britain: Their Origin and History* (Oxford: Basil Blackwell, 1985), p. 191.
- (10) Lawson p.87.
- (11) John Parkinson, *Paradisi in Sole Paradisus Terrestris* (New York: Dover Publications, 1976), p.3.
- (12) Prest p.74.
- (13) Parkinson p. 3.
- (14) Lawson pp. 85-90.
- (15) Prest p.75.
- (16) J. C. Drummond, Anne Wilbraham, *The Englishman's Food* (London: Readers Union, 1959), p. 68.
- (17) *Ibid.*, p.68.
- (18) Charles Singer, *A Short History of Medicine* (New York, Oxford: Oxford University Press, 1962), p. 46.
- (19) Andrew Boorde, *A Dyetary of Health*, F. J. Furnivall (ed.) (London: Kegan Paul, Trench and Truber, 1870), p.277.
- (20) Carole Rawcliffe, *Medicine & Society in Later Medieval England* (Gloucester: AlanSutton, 1995), pp. 82-104.